

新型コロナウイルスと妊娠、分娩、新生児 ～わかってきたこと、わからないこと～

川口市立医療センター

新生児集中治療科

ふか ま えい すけ
深 間 英 輔



妊婦さんの感染率は同年代女性と差はなく、流産のリスクは高くないものの、早産の発生率が高くなること、妊娠後期の感染では重症化リスクは高くなると言われていています。妊娠後期にお腹が大きくなると、肺が圧迫されて呼吸状態が悪化するためです。集中治療や人工呼吸が必要になるリスクが3～5倍高くなると言われていています。

妊娠中に感染した場合、胎盤を通じて赤ちゃんに感染する可能性は低く、胎児の先天異常の報告はありません。ただし、治療薬のなかには催奇形性が報告されているものもあります。分娩管理の問題から感染した妊婦さんは帝王切開での出生となり、赤ちゃんとお母さんの部屋は分けられることが多いです。母乳を介しての感染はありませんが、飛沫感染は認められています。一方で、感染予防策をしっかりとした上で、赤ちゃんとお母さんが一緒に過ごすことは可能とされます。たとえ感染しても赤ちゃんは重症化しにくいと言われていています。

ワクチンに関しては妊婦さんに関する安全性は確認されておらず、接種の努力義務の対象から外れています。特に胎児の臓器がつくられる妊娠12週までは接種を避けるべきと言われていています。医療関係者など感染リスクの高い妊婦さんの場合は相談となります。妊婦さんの感染経路の半数以上は同居家族からなので、家族が接種することは推奨されます。

確実に言えることは妊婦さん自身だけでなく、同居している家族も含めてマスク、手洗い、3密を避ける、ステイホームなどといった、感染予防策の基本を遵守することが極めて重要ということです。